

【研究室彙報】

2013年度 担当学科

一学部

准教授 渡邊洋子

同和・人権教育論 (前期)

相関教育システム論基礎演習ⅡA (前期)

生涯教育学概論Ⅱ (後期)

相関教育システム論基礎演習ⅡB (後期)

生涯教育学専門ゼミナールⅠ (前期) 生涯教育学専門ゼミナールⅡ (後期)

一大学院

教授 前平泰志

生涯教育学演習ⅠA (前期)

生涯教育学演習ⅡA (後期)

准教授 渡邊洋子

生涯教育学演習ⅠB (前期)

生涯教育学講読演習 (前期)

生涯教育学演習ⅡB (後期)

生涯教育学研究Ⅱ (後期)

授業報告

生涯教育学演習ⅠA・ⅡA

報告者：池田法子

Advanced Seminar on Lifelong Education ⅠA・ⅡA

IKEDA, Noriko

本授業は、前平泰志教授を指導教官として、生涯教育学の研究における理論的、実践的課題について討議するゼミナールである。2013年度は、昨年度に引き続き月曜日の4・5限に隔週で開講された。

本授業では、毎回のゼミにおいて各参加者が自分の研究課題に関する原稿を持ち寄り、ディスカッションをするという形式をとっている。あらかじめ発表者を決めない理由は、毎回の授業ですべての参加者が主体的に参加し、かつ、定期的に自分の思考を文章化する習慣をつけ、批判的に議論する中で論を練り上げていくトレーニングをするためである。レジュメを持ち寄る際に重視されるのは量ではなく質である。すなわち、いかにオリジナリティと説得力を持って論を展開できるか、断片的な単語を集めるのではなく文章として表現することができるか、少しずつでもよいから継続的に自分の研究課題に取り組むこと

ができるかが問われる。

参加者は、本研究科の院生・学部生を始めとして、ゼミの OB・OG、他研究科の院生、京都大学シニアキャンパス(2005~2008年に開講)の受講生など、多岐にわたった。各参加者の問題関心は、演劇活動、地域における音楽会活動、EUの教育政策、防災教育、生活記録運動、多文化共生授業などが挙げられる。これらの視点から、生きることと学ぶことを捉えようとする研究活動が行われた。

また、本授業が関わるフィールドとして、童仙房での取り組みがある。詳細については、本誌で実践報告として紹介されている通りである。

生涯教育学の研究を深めていくにあたって、難しさと魅力でもあるのは、一人ひとりの参加者が研究者であると同時に実践者である点である。今後もこのゼミを通して、自己の研究と自分自身を磨いていきたい。

生涯教育学演習 I B・II B

報告者：藤代 諒

Advanced Seminar on Lifelong Education I B・II B

FUJISHIRO, Ryo

2013年度の生涯教育学演習 I B・II Bは、「生涯教育学研究の問題意識と基本的アプローチ、研究対象、研究の方法と形態の吟味と選択、さらに具体的な作業の進め方などについて、個々の参加者の研究発表による共有化と議論を通して体験的理解と体得をはかり、各自がそれらの成果を自らの研究に活かせるようになることを目的とする。」(「生涯教育学演習 I B」概要, 2013年度シラバスより抜粋)という目的のもと、前期・後期それぞれ火曜日隔週の4限・5限目に開講された。担当教員は渡邊洋子准教授である。

本演習では、主に参加者各自の研究発表を中心に質疑応答や全体議論を行う形式で進められた。そこでは、本演習での発表を「義務」としてではなく、それぞれが自分の研究成果や構想を発表できる「権利」として捉え、参加者の積極的で自主的な運営のもとに行われた。発表は、原則1コマ(90分)の中で、参加者1名の発表、質疑応答や全体議論が行なわれる。また、0.5コマ(45分)という発表枠も設けて、参加者が各々で発表時間に合わせた発表が可能な柔軟な形態となっていた。この発表枠で、4限・5限に最大2コマ続きで発表が行なわれた。さらに、参加者は発表以外に、議論の進行役として司会者や、発表者一人に対して一人のコメンテーターをつけ、論点を挙げる役割を担った。

本演習では、本学の教育学研究科修士課程、博士課程の院生をはじめ、他研究科の院生や生涯教育学講座の卒業生、生涯教育に関心のある社会人の方など、在学中の学生に限らず、様々なバックグラウンドを持った社会人の方々が多く参加されていた。社会人の方の参加によって、より多角的な視点が議論に反映され、毎回の授業で非常に多彩で広がり

ある議論が繰り広げられた。また、参加者の発表テーマとしては、「実践的コミュニティにおける学びと変容」、「芸術家の相互交流と自己意識」、「イギリスにおけるユースワークの役割と可能性」、「グローバル化する世界における美術館来館者の経験と学び」、「障害者スポーツ」、「大学の通信教育」などのように、様々なテーマが扱われていた。この他には、実践報告のような発表も行われていた。

本演習では、生涯教育に関心のある社会人の方の参加によって、より多角的な視点が議論に反映されることに意義がある。これは、発表者にとって、どのように伝えれば、わかりやすく伝わるのかなどを、様々な質問や意見から反省する機会となる。また、講座の卒業生などによる、修士論文のアドバイスも頂けることから、院生にとって自身の研究の客観的評価を得る機会となっている。さらに、参加者の自主的な運営が、一人一人の発言の意味や責任を各々が考えるきっかけとなり、より能動的な参加が見られ、多様な議論から参加者の各々の問題意識や関心を深める機会となる授業であった。

生涯教育学講読演習

報告者：渡川 智子

Reading in Lifelong Education

Tomoko WATARIKAWA

生涯教育学講読演習は 2013 年の前期、火曜日隔週の 4 限, 5 限に開講された。本授業は、「生涯教育学の理論的基盤として重要な文献を取り上げ、各自の問題意識や研究テーマとの関わりを交差させつつ丁寧に精読・検討することを通し、その成果を研究に反映させていくことを目指す」(「生涯教育学講読演習」概要, 2013 年度シラバスより抜粋) ことを目的とした演習である。

講読演習で取り上げた文献は、成人教育研究の大家 Peter Jarvis の著書『*Learning to be a Person in Society*』(Routledge, 2009) である。学習という営みは生涯にわたるプロセスであり、私たちは、自らの学習を積み重ねた結果を生きているとも言える。だが人は生きることを通して、一体どのように学んでいるのか。本書はこのような問いの下、人が社会のなかで学ぶこと、そのなかで人間存在として育つことについて、多彩な学際的アプローチを踏まえ総合的に考察している。

この書は大きく 3 つの SECTION に分かれている。SECTION I 「Laying the foundation」は 5 つの章で構成されており、学習にまつわる重要な概念の背景が整理されている。SECTION II 「Processes of learning」では、人間の学びの異なる様相を 10 章にわたる項目によって探求し、人間の学びの過程を明らかにしようとする。SECTION III 「Being and

becoming」では、「Being」と「Becoming」という2つの概念から、社会のなかに存在する人間の性質について考察する。

まず初回の授業では、この本をどのように精読、検討していくかということを生徒主体で話し合った。そして SECTION I と SECTION III はそれぞれ分担して全体を読む、SECTION II は、自分にとって関心の高い章を各自が2つ取り上げて読む、という方針が定まった。授業に際しては、自分が担当した章をまとめ、論点や疑問点を挙げた日本語のレジュメを持参し、それを基にしながら議論を行っていく方法をとった。著者の Peter Jarvis が参照する学問領域は、教育学、哲学、社会学、心理学などと非常に多岐にわたっており、私たちは一つの事象を様々な学問領域から多角的にみていくことの面白さを実感するとともに、自分自身の学識の浅さを何度も痛感した。また議論は毎回本当に白熱し、授業時間をオーバーして、さらには研究室に戻ってからも、それぞれの見解について熱く議論を交わすこともあった。ついには議論の論点となった点について、P.Jarvis に直接メールで質問をするなど、授業という枠組みをゆうに超えた発展的な学習過程を創造することができたと感じる。

Peter Jarvis によれば、私たちはみな、社会における人として、そして自分自身であるために学んでいる。この授業で得た経験はまさに、私たち一人一人が自分自身であるために欠かせない学習プロセスであったように思う。本書の内容は各々の研究にもおおいに関係づけていくことができるだろう。この授業で得た内容と経験を共に、今後の研究活動や自分自身の生活に繋げていきたい。

同和・人権教育論

報告者：中尾友香

Education for Buraku Liberation and Human Rights

NAKAO, Yuka

本授業は、本学の2・4回生を対象に月曜日2限目に開講された。担当教員は渡邊洋子准教授である。

テキストは『21世紀の人権』（江原由美子監修、社団法人神奈川人権センター、2011）を使用した。「被差別部落と人権」だけでなく「外国につながる人々の人権」、「障害者の人権」、「男女平等と人権」、「高齢者の人権」、「アイヌ民族の人権」、「沖縄の人々の人権」など幅広く取り上げた文献である。テキスト以外にも、ニュース報道やテレビ番組なども素材として取り上げ、一人一人が実際の生活と人権をつなげられるように行われた。それぞれのテーマについて読み解き、議論することによって人権をより多面的に捉えられるようになることが目指された。

毎時間提出された小レポートからは、これまでの自分の価値観を振り返るものや、人権教育のあり方に対する疑問、テーマに関わるエピソードなど多様な反応がみられ、それぞれが多様に思いを巡らせている様子が伺われた。

成績評価は出席と課題レポートによった。課題レポートに取り組むにあたって、文献による調査だけでなく、フィールドワークや映画分析などの方法も奨励された。これをきっかけに、初めて人権問題に取り組む生涯学習施設を訪れたり、祭りを人権という観点から見たりする学生も多く、問題意識を深める授業となった。

相関教育システム論基礎演習ⅡA・ⅡB

報告者：種村文孝

Undergraduate Seminar : Interdisciplinary Studies of Educational System
ⅡA・ⅡB
TANEMURA, Fumitaka

相関教育システム論基礎演習ⅡA・ⅡBは、本学の教育学部2回生から4回生を対象に、前期・後期それぞれ水曜日4限目に開講された。担当教員は渡邊洋子准教授である。生涯教育学について、自分の問題意識でとらえられるように、授業で何を扱いたいのか、どのように取り組んでいくのがよいか、学生の主体性を重視した内容となっている。前期の受講者数は22人、後期の受講者数は16人と多くの学生が、それぞれの問いと向き合った。授業は前期も後期もグループワークを通して行われた。

前期は、生涯教育に関する本を複数用意し、その中から関心のある本を選ぶという形でグループを形成した。そして、各グループ毎にテーマについて深めて、発表を行うこととした。テーマは、「メディア」「水族館」「NPO」「成人教育」「地域と子育て」の5つであった。「メディア」グループは、メディアリテラシーを身につけるワークショップやプログラム案を考案し、「水族館」グループは、水族館にできることは何かを考えて理想の水族館を考案した。また、「NPO」グループは、実際にNPOで働く人にインタビューを行いNPOの働きがいを考え、「成人教育」グループはウィングス京都にインタビューに行き、「地域と子育て」グループはこども未来館にインタビューに行くなど、どのグループも実践を強く意識した取り組みがなされていた。現場に触れたり、実践例を検討することで、様々な実践が向き合っている課題や効果を考えることができたように思う。各々のグループの報告を共有するにあたって、質問や意見が多く交わされるなど、生涯教育学の幅広さと奥深さに触れることができ、グループ内で議論を重ねていく時間もとても有意義なものがあったと考える。

後期は、各学生が自分の問いをたてられるようになることを目指した授業であった。授業の進め方については、前期と同じく学生主体で決めて、グループワーク形式となった。しかし、前期がグループワークで実践に触れるものが多かったのに対して、後期は文献を丁寧に読んで深めていくものが多かった。各自、関心があることを問いの形でまとめ、それをもとに、「人材育成」「世代間交流」「ESD(持続可能な開発のための教育)」「世界遺産」の4つのグループをつくって、グループ毎に問いを深めていった。グループで議論を重ねるグループもあれば、出町商店街を訪れるグループもあれば、1人で黙々と世界遺産について調べる者もいた。それぞれの取り組みがどのような課題と向き合っているのかなどを、グループ毎に全体で共有した。そして最後は、1人1人がこれから何をもっと深めていきたいのかという問いをたてるための振り返りを行った。

生涯教育は領域が広いので、全体をおさえようとすると、浅く広くなりがちだが、この授業では各々の関心があるテーマを掘り下げていくことによって、生涯教育とは何かを考えられるように1年間取り組んできた。各々が実践の現場にいる者が直面している課題や取り組みと向き合えたのではないかと思う。

生涯教育学専門ゼミナールⅠ・Ⅱ

報告者：池田法子

Seminar on Lifelong Education Ⅰ・Ⅱ

IKEDA, Noriko

生涯教育学専門ゼミナールとは、生涯教育学研究として卒業論文を執筆することを主な目標として、関連する知識や方法論を学ぶゼミである。2012年度の本授業は、水曜3限に開講された。渡邊洋子先生を指導教官として、今年度卒論を提出した4名の学部生と、来年度に卒業論文を執筆する5名の学部生に加え、生涯教育学を専攻する院生5名によって構成された本ゼミナールは、学生自身が自分の研究テーマを深めるために議論し、互いに学び合う場となっている。

前期授業においては、まず所属学生同士が相手のことを理解し、発言しやすい雰囲気を作っていくために、グループワークを数回行った。その後は、基本的に90分1コマの授業において1、2名の発表者が問題意識、構成、調べたこと、課題などを発表し、それについてディスカッションをするというスタイルで授業は進行した。

後期授業ではグループワークは行わず、卒業論文執筆の大詰めを迎える学生の発表を中心に、議論が進められた。自分なりに問いを立て、探求していくというプロセスは、しばしば学生にとっては厳しい道のりであり、ゼミは緊張感に包まれる。一方で、ハロウィーンの日には仮装をしてみるなど、ユーモアセンスにも事欠かないというのが本ゼミの特徴でもある。

本年度提出された 4 本の卒業論文のテーマは、「日本の動物園・水族館における調査・研究の現状と課題」「俳句未経験者における句会の及ぼす影響について」「学童保育の果たす子育て役割の現状と課題」「読書会活動の変遷と現代的特徴」など、多岐にわたる。卒業論文提出締め切り直前には、院生や 3 回生が卒業論文に対してコメントをする自主学習も見られた。学生自身のこれまでの経験から生じた疑問を、一つの論文として形にしていくというプロセスにおいては、執筆者だけでなくその周囲の学生もが、多くのものを得られたに違いない。